






2. 青森県


地理

県庁所在地	青森市
地域区分	津軽地方 青森市、東津軽郡、弘前市、黒石市、平川市、中津軽郡、南津軽郡、五所川原市、つがる市、西津軽郡、北津軽郡 南部地方 むつ市、下北郡、十和田市、三沢市、上北郡、八戸市、三戸郡
人口	1,246,291人(全国第31位)
特長	<ul style="list-style-type: none"> 縄文時代の遺跡が数多く出土:三内丸山遺跡(青森市)やニツ森貝塚、是川遺跡(八戸市) 日本有数の豪雪地帯 全国有数の農業産出県:リンゴ、ごぼう、ニンニクが全国一の生産量 全国有数の水揚げ高を誇る八戸サーバ、イカが国内一の水揚げ 「ねぶたまつり」が全国的にも有名なお祭り 有名な作家として太宰治と寺山修二の出身地

観光

観光地	<p>弘前城：弘前市 弘前公園に隣接する弘前城は本丸・北の郭が重要文化財として残っています。1603(慶長8)年に大浦為信が城の築城を計画し、完成前に亡くなったため、3男・信枚(信牧)が為信の後を継いで完成させました。</p> 
	<p>八食センター：八戸市 八戸市の近海でとれた新鮮な食材が揃っています。市場と厨スタジオに分かれていて、「食べる」ことに関しては満足度がかなり高いスポットです。</p> 
	<p>三内丸山遺跡：青森市 2000年に国の特別史跡に指定。遺跡跡には住居群、倉庫群のほか、シンボリックな3層の掘立柱建物が再現されており、資料館もある。</p> 
	<p>奥入瀬渓流：十和田市 渓流沿いの遊歩道では4時間半くらいのトレッキングが楽しめる。新緑や紅葉の時期は、特に美しい景観となり、1928年に天然記念物に指定されている。</p> 
	<p>十和田湖：十和田市 日本の湖沼では12番目の面積を誇る湖。渓流散策、展望エリア、キャンプやカヌーも楽しめる。近くに温泉もあり、ゆっくりとした時間を過ごすことができる。</p> 
	<p>恐山 死者の御霊を呼び寄せを行なうイタコ(いたこ)がいる霊場、いわゆる心霊スポットとして有名な恐山。4つの温泉があり、宿泊をすることもできます。1杯飲めば10年、2杯飲めば20年、3杯飲めば死ぬまで若返ると言われる、「若返りの水」があります。</p>

特産品

食品	食品	<ul style="list-style-type: none"> りんご — 全国都道府県別・収穫量第1位 ニンニク — 田子産ニンニク(ふくちホワイト六片種)は有名 毛がに — 陸奥湾で獲れます。旬の時期は4月から5月。 ホタテ — 北海道に次ぐ漁獲量 シジミ — 十三湖(五所川原市)・小川原湖(上北郡東北町)はシジミの産地として有名。シジミラーメンが食べられる。 マダラ — 全国有数の産地 青森シャモロック 猪肉 — 東津軽郡今別町には、奥津軽いのしし牧場がある フオアグラ — 日本国内では唯一の産地
食品	料理	<ul style="list-style-type: none"> なまず料理 — 馬淵川に生息するナマズをを天ぷらや南蛮漬けにした料理 いちご煮 — ウニとアワビを贅沢に仕立てた潮汁 せんべい汁 — 小麦粉で作った煎餅を具にする名物鍋料理(八戸) 馬肉鍋 — 県南地方は馬の産地
工芸品	工芸品	<ul style="list-style-type: none"> 津軽塗 — 国指定伝統的工芸品 青森県弘前市を中心に製作販売される青森県を代表する伝統的工芸品です。現代まで伝わっているのは唐塗/七々子塗/紋紗塗/錦塗の四技法です。 

産業

拠点がある有名企業	株式会社吉田産業(八戸市) 株式会社サンデー(八戸市) 株式会社角弘(青森市)
主要産業	1位:卸売・小売業 2位:医療・福祉 3位:農業・林業・漁業
産業別就業者の割合	◇第一次産業 約12.6% ◇第二次産業 約20.1% ◇第三次産業 約64.6%
名目県内総生産額	約4兆5,803億円
産業に関する施設・史料館	<ul style="list-style-type: none"> ◇ねぶたの家 ワ・ラッセ 2011年1月にJR青森駅の海手にオープン。青森ねぶた祭りを体感できる観光施設で、館内には2階まで吹き抜けとなっているねぶたミュージアムやねぶたホールがある。 ◇青森県りんご史料館とりんご栽培試験圃場 世界唯一のりんご研究の施設。新品種・台木の開発病害虫の総合防除等、様々な研究をしている

性格		
県民性	全体	歴史的背景でも「犬猿の仲」だった津軽（西部）と南部（東部）のふたつの地方が統合されてきた青森県。統一されたとはいえ津軽弁・南部弁の方言はもちろん、民謡に至るまで県民性も大いに異なるのが特徴。津軽にはでしゃばりタイプが多いのに対し、南部は口ベタで引っ込み思案が多く両極端といえる。もちろん男女とも口ベタで誠実、温和と照れ屋な「東北人的」気質と、「じょっぱり」と言われる頑固さは、青森全体の県民性として根付いている。津軽、南部出身者とも仕事は真面目にコツコツと努力するし、恋愛も浮気なんてもってのほかのスタンス。
	男性	東部と西部では性格が大きく異なるが、全体的には誠実で温和、世渡り下手、考え込むタイプが多く、照れ屋という点では共通している。頼まれると嫌といえないところがあり、研究熱心な努力家も多い。酔うと意外な一面を見せることも。
	女性	母親のがんばりを見て育つため、しっかりした女性が多い。気難しそうに見えても、本質はロマンチスト。活発で度量も広く姉御肌。
歴史（人物）		
歴史上有名な人		<p>太宰治 青森県北津軽郡金木村（後の金木町、現在の五所川原市）に、県下有数の大地主である父津島源右衛門（1871年 - 1923年）と母タ子（たね、1873年 - 1942年）の六男として生まれた。両親に11人の子女のうちの10番目。1930年（昭和5年）、弘前高等学校文科甲類を76名中46番の成績で卒業。フランス語を知らぬままフランス文学に憧れて東京帝国大学文学部仏文学科に入学。実家からの仕送りで豪奢な生活を送る。それに対する自己嫌悪と六男坊という太宰自身の立ち位置もあいまって、マルキシズムおよび左翼運動に傾倒してゆく。講義には殆ど出席しなかった。在学中に、カフェの女給で人妻である田部シメ子（1912-1930）と出会い、鎌倉・腰越の海にて入水自殺を図る。だがシメ子だけ死亡し太宰は生き残る。</p> <p>その後第1回芥川賞候補となるも落選。選考委員である川端康成から「作者、目下の生活に厭々雲あり」と私生活を評され、「小鳥を飼ひ、舞踏を見るのがそんなに立派な生活なのか」と文芸雑誌上で反撃した。 ◇都新聞社（現・東京新聞）に入社できず、またも自殺未遂。 ◇1936年（昭和11年）、前年よりのパピナール中毒が進行し治療に専念するも、処女短編集『晩年』を刊行。翌1937年（昭和12年）、内縁の妻・小山初代（1912-1944）とカルモチン自殺未遂、一年間筆を絶つ。 ◇1939年（昭和14年）1月8日、井伏鱒二の自宅で、甲府市出身の地質学者・石原初太郎の四女の石原美知子と結婚式を挙げる。 ◇1948年（昭和23年）6月13日に玉川上水で、愛人山崎富栄と入水自殺した。38歳没。</p> <p>【代表作】 『走れメロス』、『津軽』、『お伽草紙』、『斜陽』、『人間失格』</p>
歴史		
歴史	古代	日本列島では1万2000年前になると、ものを貯蔵・煮沸する容器として土器が考案され、津軽半島の蟹田町（外ヶ浜町に合併）にある大平山元遺跡では、無文土器や局部磨製石斧が出土し、生活の様相が大きく変わった。縄文時代の遺跡として、三内丸山遺跡、亀ヶ岡遺跡、是川遺跡などが現在までに発見されている。これらの遺跡には豊富な土器・広い集落、また他地方のものと思われる遺物が発見され、文化・経済などの面で周辺にも強い影響を与えていたと考えられている。また、弥生時代前期の水田遺跡として知られる砂沢遺跡や中期後半の垂柳遺跡が発掘されており、米の栽培が行われたことが確認されている。ただし、弥生時代中期に稲作は衰え、大幅な人口流出があったものと考えられている。
	近世	豊臣政権時代の奥州仕置を経て、北奥大名領が成立する。慶長5年（1600年）、関ヶ原の戦いにおいて南部氏ら東北大名は会津上杉景勝包囲への動員を命じられており、津軽氏は東軍本隊と合流し美濃大垣城攻めなどに参加している。関ヶ原の後、東北では会津上杉氏の出羽米沢への転封をはじめ、大規模な大小名の再配置が行われるが、陸奥北部では南部・津軽領の支配に大きな変動はなく、陸奥国北部のうち太平洋側の東部が南部氏の盛岡藩領8万石（後に20万石に高直し）、日本海側の西部が津軽氏の弘前藩領4万5000石（後に10万石に高直し）となり、両大名領の藩境は津軽側の狩場沢、南部側の馬門に定められた。ほか、県南東端から岩手県北東部端にかけては盛岡藩と同じ南部氏一族が支配する八戸藩2万石があり、県中部には弘前藩の支藩として黒石藩1万石とその飛地があった。領域は本州アイヌの居住地で、弘前藩領である陸奥湾沿いの夏泊半島や、盛岡藩領では津軽海峡に面した下北半島が主な居住地であり、アイヌ語地名も見られる。アイヌの居住地は領主側に把握され、アイヌは弘前・盛岡両藩主へお目見えし、産物を上納したという。アイヌの生業は畑作や漁業・廻船業のほか蝦夷地（北海道）の松前藩領との交易で、狩猟や漁労を生業の中心とする蝦夷地のアイヌとは異なり、北奥地域の漁民と変わらないものであったと考えられている。江戸時代後期にはアイヌ居住地への和人の進出が顕著になり、同化が進んだ。南部と津軽では気候風土も異なり、特に太平洋岸の南部地方では冷害・凶作が発生しやすく飢饉の際に大きな被害を受けたが、下北地方では餓死者がほとんどいなかったという。戊辰戦争時、弘前藩も盛岡藩も当初奥羽列藩同盟に属していたが、途中で弘前藩は官軍に寝返った。戦後、盛岡藩は大幅に石高を減らされ、その跡に斗南藩が置かれ、もと会津藩の松平家が3万石が入った。同じ頃、盛岡新田藩とも呼ばれ、その領域が明確ではなかった七戸藩1万石の領域が確定した。
有名学校（学力／スポーツ）		
有名高校	学力	青森高校／八戸高校／弘前高校
	スポーツ	<p>◆青森山田高校 【野球】 2004年から6年連続で夏の甲子園に出場</p> <p>【卓球】 2015年卓球男子シングルスで青森山田勢として10連覇を達成。 ・福原愛（世界選手権ロッテルダム大学混合ダブルスで銅メダル）（中学校開校直後の5月に転入） ・水谷隼（卓球男子全日本選手権単5連覇 2006年～2010年 ※男子史上初の快挙達成） 【サッカー】 多くのJリーグ選手を輩出 ・柴崎岳（日本代表 1992年生）／櫛引政敏（1993年生）</p> <p>◆星光学院高校 スポーツに非常に力を注いでおり、日本全国から選手が集まっている。 【野球】 2011年夏の第93回全国高等学校野球選手権大会では、青森県勢として1969年の三沢高校以来42年ぶりに決勝戦へ進出。 2012年春の第84回選抜高等学校野球大会でも、青森県勢として選抜大会初の決勝戦に進出。 ＜有名選手: 坂本 勇人(巨人)＞ 光星学院高等学校に進学し、1年秋から遊撃のレギュラー、2年春から4番を務め、秋の東北大会準優勝し、3年春の第78回選抜高等学校野球大会に出場。春の東北大会では16打数13安打で打率.813、4本塁打の活躍で注目を集めた。高校通算39本塁打。 2006年高校生ドラフトにて、巨人が堂上直倫の外れ1位で坂本を指名。26歳での主将就任は巨人では戦後最年少。</p> <p>【男子バレー】 弘前工業高校／五所川原工業高校／八戸工業大学第一高校の3強</p>
有名大学		弘前大学 馴染みのない人にとっては、理解するのが難しいとされる東北弁。なかでもクセが強いと言われるのが、津軽弁。それを解説した青森県・弘前大学の教材が話題になっている。

有名人

出身有名人	タレント	◇田中義剛:八戸市 ◇新山千春:青森市 ◇松本莉緒:つがる市
出身有名人	歌手	◇ELLY(えりー/三代目J Soul Brothers):三沢市 ◇吉幾三:北津軽郡金木町
出身有名人	俳優	◇ 松山ケンイチ :むつ市
出身有名人	文化人	◇室井佑月:八戸市 ◇長部日出雄(直木賞作家「津軽世去れ節」「津軽じょんから節」、弘前市) ◇太宰治:北津軽郡金木村
スポーツ選手	サッカー	◇榎引政敏:青森市 ◇ 柴崎岳 (サッカー日本代表 鹿島アントラーズ):上北郡野辺地町 ◇小林悠
有名選手	その他	【アーチェリー】 古川高晴(ロンドンオリンピック個人戦 銀メダリスト):青森市 【大相撲】 高見盛精彦:北津軽郡板柳町 貴ノ浪真博:三沢市 舞の海秀平:西津軽郡鰺ヶ沢町 【レスリング】 伊調馨(2012ロンドンオリンピック金メダル):八戸市 伊調千春:八戸市 小原日登美(ロンドンオリンピック 金メダリスト):八戸市 【ボクシング】 畑山隆則(WBA世界スーパーフェザー級チャンピオン):青森市



プロスポーツチーム

アイスホッケー	東北フリーブレイズ(アジアリーグアイスホッケーに所属) ※本拠地 郡山市、八戸市
バスケット	青森ワッツ(bjリーグ)

その他

その他	<p>【リンゴ生産】 県のりんご試験場では約300種、県内では約50種が栽培されており、市場に出荷されているのは約40種類。もちろん日本一の出荷率である。 紅玉、スターキング・デリシャス、世界一、ジョナゴールド、陸奥、星の金貨、つがる、シナゴールド、王林、ふじ、金星、あおり11、しおりの詩、恋空…などなどこれでもほんの一部の品種である。 りんごジュースも格別に美味しい。りんごといえば青森。しかし、アップルといえば…ジョブズ。</p>
その他	<p>【地域の名前】 〇戸とつく地名が多い(八戸など) 一～九まである。四戸は今は無い。 ※一、二、九は岩手県</p> <p>【県民の苗字】 全国と比較すると、「工藤」姓と「成田」姓が異様に多い。 「工藤」姓は青森県で最も多い姓(全国では65位) 「成田」姓は青森県で第5位(全国では182位) 他にも、三上、対馬、葛西、小笠原、今、相馬、福士、小笠原、蛇名などが全国比率より飛び抜けて多い。</p>
その他	<p>【地域性】 青森県内では青森・八戸・弘前の街がそれぞれ対立しているといわれている。 三都市が互いに敵対意識を持っている。</p>
その他	<p>【ねぶた祭り】 「ねぶた」の起源には諸説ある。 ①平安時代の征夷大將軍・坂上田村麻呂に由来するという説 東北一帯を支配していた「蝦夷」を討伐する際に戦場を灯籠で照らし笛や太鼓をはやし立てた ②七夕行事から始まった</p>